

古墳文化が花開くまで⑤

争い・個人間の場合も集団同士の場合も、お互いがまたはどちらか一方が相手方が持つている何らかの権利を奪おうと図って生じるものである。そして集団と集団が武器を手にして戦い、たくさん犠牲者を出すという大規模な争いが『戦争』である。日本列島における『戦争』の始まりは、米作りが人びとの生活の基盤となっていた弥生時代であるとされている。縄文時代までは獲物に向けていた弓矢などの道具を武器として人にも向けるようになるという大きな変化がこの時代にあったのである。

水稲農耕や金属器の使用といった弥生文化の発展によって、食料（米）の生産力が高くなると、食べる分と翌年のための種籾をのぞいても余りができるようになり、その余った収穫物（余剰生産物）を蓄積しておくということが始まった。しかし収穫量はそれぞれが多かったり少なかったり、の差があったことから『たくさん貯蓄できる人』と『あまり貯蓄できない人』という貧富の差が発生した。また集団での作業が基本となる水稲農耕には、共同作業する人びと



戦いのイメージ図

をまとめる指導者が必要であったため、『指導する人』と『労働する人』とに役割が分担されるようになった。そういった貧富の差と役割分担から『支配する人』『支配される人』の身分の差が生まれ、集落（ムラ）は統制されたものへとなっていた。そして統制されたムラとムラは、土地や利水をめぐる権利や蓄積された余剰生産物（富）を奪い合う『戦争』をするようになる。支配者（首長）にはムラを勝利へ導く手腕が求めら

れ、被支配者（ムラ人）は兵士として戦った。水稲農耕は人びとに食料基盤の安定をもたらした一方で、『戦争』という負の副産物をもたらしたのである。

弥生時代に『身分の差』があったことは、当時の共同墓地（集団墓）の中で、特別な墓とそれ以外の墓という違いが見られることからわかっている。町内の永吉天神段遺跡（档ヶ山）でも、弥生時代中期（約2100年前）の集団墓が発見され、

特別な墓のタイプのひとつであり首長の墓と考えられている円形周溝墓が一基と、それ以外の墓・土坑墓が



永吉天神段遺跡の円形周溝墓

（写真提供：公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）

たくさん確認されている。

また、弥生時代に『戦争』があったことは、周りに濠をめぐらした『環濠集落』や平地より100m以上高い場所に形成されている『高地性集落』のようにムラが外部からの侵入を防御する性格を持つている点や、縄文時代には存在しなかった投弾・剣・矛・戈といった武器の登場に加えて殺傷人骨が見つかった点から明らかである。

争いの中で統合や同盟が繰り返されながら、ムラとムラとがまとまり大きなムラとなり、大きなムラとムラとがまとまり、次第にクニへと発展していった。『魏志倭人伝』『後漢書東夷伝』といった中国の歴史書には、弥生時代後期にあたる約1800年前に倭国（当時の日本は中国からそう呼ばれていた）では200余りものクニが割拠し争っていたことが記されている。『倭国大乱』と呼ばれる時代である。

そのような大乱を乗り越え、広域的なクニを束ねる首長となった人物は強大な権力を持った。そしてその権力の象徴ともいえる巨大なモニュメントが造られる時代へと突入していくのである。（続く）